
流星のロックマン peace

stars

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン peace

【Nコード】

N7423Q

【作者名】

stars

【あらすじ】

蒼いヒーロー、ロックマンこと星河スバルは地球に接近した巨大隕石メテオGを破壊した。

あれから2年後スバルは中学生になった。
やっと手にした平凡な日々を過ごすスバル達のほのぼのストーリー。

ブログ・平和な日々（前書き）

初投稿です。

少しでも進歩できるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

プロローグ・平和な日々

蒼きヒーロー、ロックマンこと星河スバルは三度に渡る地球の危機を救った。

あれから2年がたち地球は完全な平和がおとずれた。

2年・・・、つまり5年生だったスバル達は中学生である。

平和な彼らの日常の物語が今、幕を開ける・・・。

ある日の朝・・・

「ZZZZ・・・」

気持ちよさそうに寝息をたてているこの少年、名前は“星河スバル”。

かつては強大な敵を何体も倒してきた英雄だが朝には勝てないらしい。

『おい！起きろ！スバル！！』

こっちの青い電波体は“ウォーロック”。

スバルのウィザードであり、また、良き親友でもある。

「ZZZZ・・・」

ウォーロックの叫びも虚しくそのまま寝続けるスバル。

『チツ、こうなったら・・・』

起きてースバル君!!』

「!!ミソラちゃん!?!ってあれ?」

周りを見渡すがミソラの姿などどこにも見えない。それもそのはず

『ギャハハハ!引っかけたな、スバル!!』

そう、ウォーロックの声マネだったからだ。

「ひどいよ、ロック・・・」

『起きないお前が悪い』

「そんな・・・って今何時!?!」

『遅刻15分มาแล้วな』

刹那、スバルは光速ともいえる速さで着替え、階段を降りていった。

ブログ・平和な日々（後書き）

いかがでしたか？

投稿ペースは受験があるので少し遅めですのでご了承ください

プロローグ2・ある少女の名案（前書き）

文章が読めます

プロローグ2・ある少女の名案

ここはとある会議室・

「うむむ・・・もう二人は中学生か・・・」
二人、それは大人気少女シンガー・響ミソラとミソラと同じ年である人気タレント・スズカのことである。

「やはりアイドルとはいえ少しは勉強できたほうが・・・」
そう、二人の天才アイドルは、その多忙さ故、まともに学校に行けてないのだ。

「だったら、二人は一度アイドル活動を休止し、学校にかよわせよう！」

「しかしスズカはともかくミソラは両親が・・・」
そう、ミソラの両親はすでに他界しているのだった・・・。

「それならいい案があります!!」
突然部屋の中に聞き慣れたソプラノボイスが聞こえてきた。

「なっ、ミソラ!! いつの間に!!」
聞き慣れたソプラノボイス・その声の主は二人のアイドルの内の一人・響ミソラだったのだ。

「まあ、その話はおいとして私の案を聞いて下さい」

その案は後にある一人の少年を巻き込む大事件？となるのであった。

プロローグ2・ある少女の名案（後書き）

次回、お約束のあの出来事が！？

第1話 遅刻へのカウントダウン(前書き)

2話投稿しました。

第1話 遅刻へのカウントダウン

光速ともいえるスピードで階段をかけ降りるスバル。

「あら、おはようスバル」

スバルに挨拶をするこの女性はスバルの母親である、
“星河 茜”
である。

「おはだきますー!!」

とあまりに急ぎすぎて、

「おはよう」と「いただきます」

を合成し、新たな言葉を作り出したスバル。
流石、地球を救ったヒーローである。

・・・無駄話がすぎた、そろそろ戻ろう。

後残り13分である。

そのとき

ピンポン

地獄への呼び鈴がなった。

「っ!!ヤバい!委員長達が来ちゃった!!」

まだ食事は半分程残っている。

「ごめん、母さん！もう逝かなくちゃ！！」
『漢字がおかしいぞ、スバル』

ウォーロックのツツコミなど聞いている余裕が無いスバルは地獄への門（玄関）の扉を開いた。

「つつつおつつつそおおい！！！」

この鬼神の如きオーラを纏う少女、彼女が委員長こと“白金 ルナ”である。

ちなみにルナの両サイドにいるのは、子分もとい友人である“最少院 キザマロ”と“牛島 ゴン太”である。

「ひいひい！！ごめんなさい！！」
外で土下座をするスバル。

「い、いや、そこまで謝らなくても・・・」
と反応に困るルナ

《やっぱり委員長は怖ええ（いです）！！》
と改めてルナの怖さを知るゴン太とキザマロであった。

「と、とにかく早く行かないと遅刻するわよ！入学式で遅刻だなんてこの白金ルナ一生の恥だわ！！」
と、全力疾走で駆け抜ける4人だった。

第1話 遅刻へのカウントダウン（後書き）

そういえば、入学式だという説明全くしてませんでしたね。以後気をつけます。

第2話 教室にて（前書き）

相変わらずggggggです・・・
すみません・・・

第2話 教室にて

学校に向かったスバル達を見送った後、茜はパートに行く準備をしていた。

とある事故で宇宙空間の中さまよっていた大吾が帰ってきた後もパートを続けていたのだ。

準備が完了し、玄関に向かおうとしたとき茜の『ハンターV.G』が鳴った。

電話のようだ。

「あら、こんな時間に誰かしら？」

と、茜はハンターのディスプレイを見る。

「あら、ミソラちゃんじゃない」

と、茜は電話にでた。

「あ、もしもしスバル君のお母さんですか？」

「ええ、何かしらミソラちゃん？」

「はい、実は……」

と、ミソラは先程の会議で決まった事を話す。

「あら！そういう事だったの！いいわよミソラちゃんだったら！これからもよろしくね！」

「はい！ありがとうございます！！では、また後ほど！」
と、ミソラは電話を切った。

「うふふ、スバルが帰ってくるのが楽しみだわ」
悪戯っぽい笑みをうかべながらパートに向かう茜だった。その頃、スバル達は遅刻ギリギリで新しい学校、『コダマ中学校』に着き、それぞれのクラスに入った。

ちなみに四人は同じクラスである。

「ふうーギリギリセーフだね！」

「だな」

「ですね」

「全く・・・星河君！これに懲りたら明日からは早く準備しておくこと！いいわね！」

「はい・・・」

ルナにも勝てないスバルであった。

「ねえ、今星河って・・・」

「もしかしてあの星河スバル！？」

「スゲー！本物のロックマンだ！！」

そう、実は二年前スバルの父親・星河大吾が地球に戻ってきたときにロックマンの正体は自分の息子である星河スバルだ。という発表をしたのである。

それからというものスバルは国民的アイドル・響ミソラと同じ位の知名度になったのである。

しかし彼らは冷静だった。
なぜなら二年間も似たような状況を体験しているのだ。
だから少しぐらいは想定範囲内だった。

本人を除いては、だが

当の本人が一番経験していることなのにスバルはあたふたしながら
その対応に追われている。

“何故馴れないのかしら？”

“何故馴れないんでしょう？”

“はあー飯まだかなー？”

と、ゴン太以外当然の疑問が浮かぶのであった。

そのとき

ピンポンパンポーン

『これから入学式を行いますので新一年生の皆様は体育館へ移動して下さい』

助かった。と思うスバルであった。

第2話 教室にて（後書き）

次回、お約束展開その2があります。

第3話 もう一人のメンバー（前書き）

うーん・・・相変わらずイマイチです。

お約束展開その2は次話になると思います。

第3話 もう一人のメンバー

入学式がおわり、クラスに戻ったスバル達。

担任の先生が

「そういえば明日、もう一人のクラスのメンバーがくるぞー。それじゃあ解散!」
といった。

さようならー

と帰りの挨拶をした。

「いやーもう一人のメンバーって誰なんだろうね？」
とスバル。

「楽しみだぜ!」

とゴン太

「ですね!」

とキザマロ

「いい!?ちゃんと仲良くするのよ!!また不登校を出したら、私の一生の恥だわ!」

とギロリとスバルを睨むルナ。

スバルは驚きながら

「だ、大丈夫だよ!今は大切なブラザーがいっぱいいるから!」
そう、スバルは父親が事故で宇宙をさまよっている間、心を閉ざし引きこもっていたのだ。「おう!スバル!俺達はずっとブラザーだからな!」

「そうですよ！」

とゴン太とキザマロ

「皆・・・ありがとう！」

それから四人はたわいも無い話をしていた。

するとルナが

「ねえ、皆、土曜日って暇でしょ？だったらヤシブタウンにできた、遊園地に行きましょ！チケットは五枚あるわ！」

相変わらず人の都合を全く聞かない喋り方だ。

当然皆は断る理由が無いので

「はい！この日は丁度予定もありませんし！」

「おう！ところでそこには何かうまいものがあるのか？」

「うん！僕も大丈夫だよ！ところでなんで五枚？」

当然の疑問だ。

「新しいメンバーと一緒に行くと思うの。みんな異論はないわね
！」

「はい（おう）！」

それから皆と別れ家の玄関の扉に手をのばしたとき、

「だーれだっ！」

突然後ろから顔を隠されたスバル。

“なんか・・・前にもあったなこういうの・・・こういう時はえーと・・・”

「えーと・・・誰だかさっぱりわからないや！！あっはっはっはっはっ・・・」

「うーん・・・ちょっとわざとらしいな？」

「そんなこといわれても・・・僕ミソラちゃんみたく演技上手じゃないし・・・」

そう、先ほどの人物は大人気アイドル・響ミソラだったのだ。

第3話 もう一人のメンバー（後書き）

『おい！！作者！！最近俺忘れられてねーか！？』

はいすっかり忘れてましたw

『次回は出るんだろーな？』

もちろん！KY要員として♪

『ふざけんなああ！』

ウォーロックファンの皆様、大変申し訳ありませんでした。

第4話 同居とニュースと新婚さん？（前書き）

サブタイが・・・サブタイが・・・意味不だーーーー！！

第4話 同居とニュースと新婚さん？

今、スバルとミソラは部屋で話している。

「ところで今日は何できたの？」

スバルは当然の疑問を投げかける。

「えつとね・・・」

と、ミソラがいいかけた時、

「ただいまー。」

と、茜がパートから帰ってきた。

「あ、母さん帰ってきたんだ。行こう、ミソラちゃん。」

「うん！」

そうしてスバルとミソラは部屋をでて茜のもとへ行った。

「おかえり、母さん」

「おじゃましてまーす！」

「あらスバル、ミソラちゃん、ただいま。後、ミソラちゃん、これから家にすむんだから、ちゃんとおかえりなさいといいなさい」

「え、母さん、今・・・なんて？」

「・・・？おかえりなさいといいなさい？」

「違うよ、その前!!」

「ミソラちゃんこれから一緒に住むんだか「はい、そこ!」
とスバルは間髪入れずツツコんだ。

「何で今日からミソラちゃんが家に住むの!？」

「あら、ミソラちゃんから聞いてなかったの?じゃあコレ見ればわかるんじゃない?はい」
とスバルは茜から紙の束を受け取った。

「なにコレ?新聞紙？」

『なんて書いてあるんだ?』

ウォーロック、久しぶりの登場だね!

『お前は前書きと後書きの時だけでてこい!!』
おっと、怒られちゃった

「ロック、誰と話してるの？」

『スバル君、コイツの奇行には突っ込むだけ無駄よ』

『ハープ!!お前いたのかよ!!』

『当たり前よ、っていうか気づかなかったの?』

『なんか最近イライラしててな、出番少ないせいかな?おーい作者!
!出番増やせー!!』

「ロックうるさいよ・・・ウィザード・オフ!」

『おいスバル、まて（ry

お邪魔虫を除外した所でスバルは新聞に目を通した。
そこにはでっかく

【大人気アイドル、響 ミソラ 活動休止！！理由は学力不足】

と載っていた。

「え！？じゃあミソラちゃんしばらく活動しないんだ？でもこれと家に住むのとなにが関係あるの？」

「実は、明日からコダマ中学校に入学するんだ！！」

「えっ！？じゃあ新しいメンバーって・・・」

「多分私の事だと思うよ！」

「へえー、でも何で僕の家には？」

「んもー鈍いなスバル君、それは・・・スバル君に会いたかったからだよ・・・／＼／＼」

「え・・・／＼／」

スバルとミソラの顔が紅く染まる。

「うふふ、まるで新婚さんみたいね？」
と茜が冷やかす。

「・・・っ！！！！／／／／」

二人は何も言えなかった。

ちなみに今日の新聞を見て日本中が震撼したとかしなかったとか。

第4話 同居とニュースと新婚さん？（後書き）

はい、第4話、ついに同居しました。

『おい、作者・・・（怒）』

出たな、お邪魔虫！w

ぷちっ

『さくしゃああああいいいい！！もう我慢できねえ！！ここで殺つてやるううう！！』

させないよ、出てこい！！

・・・“ウォリアーブラッド・グラビティステージ・ドッペルミラ
ー”

『がああああ！体力があああ！！』

それではまた次回

『止めてくれえええ！！』

度々ウォーロックファンの皆様すみません！！

僕は別にロック嫌いではありませんよ？
では！

第5話 もう一つの目的（前書き）

久しぶりの投稿です。

ある程度話が進んだら別の連載小説を進めるので、更新は不定期です

第5話 もう一つの目的

スバルはその後、テレビを見ていた。

ちなみに内容は二大アイドル活動休止！というものだ。

もちろん、ミソラとスズカのことなのだが。

ちなみに今は全チャンネルが同じ内容だ。

「ふーん・・・やっぱりミソラちゃんとスズカちゃんってすごい人気なんだな」

『ああー！！何でこんなニュースばかりなんだよー！！』

ウォーロックはあまり芸能関係のニュースは興味無く、しかも全チャンネルが同じ内容なので我慢の限界なのである。

「仕方無いじゃないか、有名なアイドル二人が一気に活動休止なんだもん」

『けど俺は刑事ものが見たいんだよ！！スバル！！電波変換でテレビ局に殴り込みに行くぞ！』

まずい！そろそろウォーロックが犯罪まがいの行為にー！？

『グラビティステージー！……からのソードファイター×4ー！』

『ぎゃあああ！てっ、てめえハープ！何しやがる！危うく死ぬところだったじゃねーか！』

『アンタが犯罪まがいのことしかけたから悪いんでしょ！それに私あんなに攻撃しようだなんて考えてなかったわよ！全ては作者のせいだわ！』

『作者アアア！またお前の仕業かアアア！！』

あら、バレちゃった？

ごめん、ごめん♪

『フザケンナアアア・・・ぐふっ！』

あ、気絶した。

心身共にダメージがデカかったんだね♪

話は戻って

「スバル君、お風呂あいたよ」

ミソラは先に風呂に入っていたらしい。

「うん、わかったよ。ミソラちゃん」

スバルは風呂に向かった。

スバルの部屋ー

「うわあゝ、相変わらず宇宙の本がいっぱいだね」

『スバル君だものね』

「……あ、これって私のCDだ！しかもリリースしたの全部ある！」

『それだけアナタの事を想っているのよ。そういえばミソラ、アナタがここに来たもう一つの目的、あれはいつ達するの？』

途端にミソラの顔は紅潮する。

「ノノう、うん、でもタイミングが分からないんだ。」

『早くしないと誰かにとられちゃうかもよ』
悪戯っぽい笑みでミソラに言うハープ。

「もう…でも、本当に早く言わなきゃな…」
ミソラの顔にはわずかに焦りが見られた。

第5話 もう一つの目的（後書き）

もう一つの目的―

まあ勘のいい人ならすぐわかると思います。

問題は何時やるのが、だけです。

第6話 寝る場所はどこ？

「あ、ミソラちゃん」

スバルが風呂から上がってきた。

「ノノす、スバル君！？」

「どうしたのミソラちゃん。顔赤いけど、熱でもあるの？」

「だ、大丈夫だよっ！スバル君！ちよっとお風呂でのぼせちゃっただけ！」

「そう？だったらいいけど……そういえばミソラちゃん。今日からどこで寝るの？」

「え？ああ、スバルの部屋で寝なさいってお母さんが言ってたよ」

「へえーそうなんだ。…ってええ！？」

衝撃の事実を聞かされたスバル。

「でさ、ちよっとお願いがあるんだけどさ……」

ここでさらにミソラが衝撃、いや、ひよっとしたら全国民を敵に回すような発言をした。

「今日からさ…一緒に寝てくれない？」

完全に思考停止状態のスバル。

そこに丁度布団をもってきた茜がスバルの部屋に入ってきて、

「あら、一緒に寝るのね。だったらこの布団いらないわね♪うふふスバルも成長したのね♪」
と言ったのだ。

そこでスバルの思考は再び動きだし、

「な、何言ってるのミソラちゃん！それに母さん！普通に認めないでよ！何か間違いがあったらどうするの！！」

「あら、スバルは何かミソラちゃんと間違いをおかすような人なの？」

「いや…そんな訳ないけど…」

「じゃあ決まりね。じゃあミソラちゃん、スバルをよろしくね♪」

「はい♪」

完全に茜に弄ばれてるスバルであった。

そして9時になった。

「ふわ～あ、それじゃそろそろ寝ようかな。」

明日の準備をすませ、ベッドに向かうスバル。

そこには既にミソラが寝ていた。

そんなミソラの寝顔を見て

「……やっぱり可愛いな、ミソラちゃん……ってなに考えてるんだ僕は…平常心、平常心……」

なんて事を考えながら布団に潜るスバル。
しかし、スバルも入学したてだが中学生。

隣で女の子が寝ているというのはやはりすごく意識してしまう。

「……平常心、平常心……」

と念仏のように唱えながら寝ようとするスバル。

もちろんそれで眠れるわけがない。

と、そしたら隣ですり泣く声が聞こえた。

声の主は、ミソラだった。

「ミソラちゃん？」

ここはミソラの夢の中。

ミソラは走っていた。

目の前には大好きだった母親の姿があった。

「はあ、はあ、待ってよ、ママ！」

しかし、母親は振り向かない。

まるでミソラに気づいていないかのように。

「置いてかないでよ！ママ、ママ、ママあー！！！」

母親の姿が消えていった。

膝をつくミソラ。

そんなミソラの前には一人の少年が手を差し伸べていた。

「スバル…君」

ミソラはその手をとった。

とても温かい手だった―

時は少し戻り、再びスバルの方へ

「ミソラちゃん？」

スバルは泣いているミソラの顔をのぞき込んだ。

「ママ、どうして、いつちやうの…さみしいよ……」
どうやら死んでしまった母親の夢を見ているようだ。

スバルも二年前、とある事故で、父親、大吾が行方不明になっているので、家族を失う悲しみを理解している。

だから、今泣いているミソラの気持ちは痛い程分かるのだ。

そしてスバルはミソラの頭を撫でて、

「大丈夫だよ、僕がついている。」
と言った。

「スバル、君…」

その後、ミソラは泣き止み、すやすやと寝息をたてていた。

そして、スバルもその顔を見ているうちに眠くなっていき、そのまま寝てしまった。

「ポロロン… スバル君も言うようになったわねえ」

「ああ、アイツは絆を信じてから随分変わったな。」

『あら、アナタがそんなことを言うようになるなんて』

「ケツ、あんなにスバルの近くにいたら嫌でも分かってくるぜ」

「…アナタもかわったわね、地球にきたばかりの時と比べて…」

「あん？何か言ったか？」

「別に、何でもないわよ。さて、私も眠くなつたし寝るわ」
「おやすみ。」といってハーブはスリープモードに入った。

「まったく、何なんだ？ハープの奴」
そういつてウォーロックもスリープモードに入った。

それぞれの夜が更けていった。

第7話 起きて 修羅場の始まり

朝ー茜はまだ起きてこないスバル達を起こしにいった。
そして部屋のドアの前で、

「スバルー、ミソラー、時間よー！」
返事が無い。

そして茜は部屋のドアをあけて中に入った。

「スバルーミソ……あらあらこれはまだ起こさない方がいいかな？」
といって茜は部屋から出ていった。

数分後、スバルは目を覚ました。

「ふわぁーあ……もうこんな時間か。……よいしょつとわぁあ!？」
起きるために体を起こそうとしたスバル。
だがその行動は何かによって遮られてしまう。

「イタタ……ってミソラちゃん!？」
スバルはミソラに抱きつかれていたのだ。

「ううーん……あ、おはようスバル君」
スバルの声でミソラも起きたらしい。

「ちょっとミソラちゃん!離してよ!」

「スバル君は私に抱きつかれるのが嫌なの?」

ミソラは定番の技―上目使い& a m p・涙目を使用した。

「い、いや、そういう訳じゃないんだけど……」
戸惑うスバル。

「じゃあ、いいよね!」
といってまた抱きつくミソラ。

と、そこに茜がやってくる。

「あらあら、朝から随分仲いいわねえ」ひよつとしてもう二人は
そういう仲なの?」

顔が真っ赤になる二人。

そして茜は

「仲良くするのはいいけどそろそろ委員長さん達来るんじゃない?」

「うわ、マズイ!母さん今何時?」
と、昨日と同じような一日の始まりだった。

それからスバルの家のチャイムがなったのは10分後だった。
二人は閃光のような早さで朝食を食べて、準備をすませていた所だった。

そしてスバルとミソラは玄関の扉を開けた。

「あら、今日は早いじゃない……ってええ！？な、何でミソラちゃん
んが星河君の家に……？」

最初に反応したのは委員長だった。

「やつほゝ皆」

「どういう事だ！スバル！」

「そうですよ！！」

次に反応したのはゴン太、キザマロだった。

「え、えーと…その…」

スバルが返答に困っていると、

「昨日からスバル君の家に住む事になったんだゝちなみに今日から
皆と一緒に勉強しまゝす」

「…な、なんだってゝ！！」「」

三人の叫び声がコダマタウンにこだました。

……ダジャレじゃありませんよ。断じて。

それから、

「私たちと同じ学校に行く事はわかったわ。でもなんでスバル君の
家なのかしら？」

ルナは内に秘めている黒いオーラをなるべく抑えながら質問した。
…多分、ノイズ率で表すと100%まで達する程の量だ。

「うーんと、…スバル君に会いたかったから？」

ゴウツと、とてつもない黒いオーラがルナの周りに集まった。
ノイズ率的には既に200%オーバーだ。

「ま、まずいです！あのままじゃ委員長がファイナライズしちゃいます！」

「こうなったら……トランスコード003シューティングスター・ロッキマン！！」

青い光がスバルの前に集まり、スバルは蒼き戦士・ロッキマンになった。

「ろ、ロッキマン様！？」

といってルナは黒いオーラを引っ込める。

「皆！今の内に！！」

といってスバル達四人は逃げ出すように学校へ向かった。

「あ、こらっ！待ちなさい！！」

ルナの叫びがまたコダマタウンにこだました。

第8話 隣りの席のミソラちゃん

ファイナライズ寸前のルナから逃走して見事遅刻五分前に学校についたスバル達。

「はあ、はあ、やっと着いた……」

「本当……ルナちゃん怖かった」

ルナを怒らせた張本人であるミソラは何の悪びれもなく感想をもらす。

「はあ、はあ、つか電波変換してキザマロつれたほうがもっと早くついたんじゃないか？」

「「「あ……」」」

ゴン太がもつともなことを言う。

そこに、

「アンタ達……私の事……忘れてるでしょ……」

「い、委員長!？」

「アンタ達……覚悟しなさい……!」

ひひひひひ!

と四人の叫びが……と、そのとき、

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

「まずい！早く教室へ行かなきゃ！」

「あつ！ちよつと！……休み時間覚えてなさいよ！」

そして教室に入るスバル達。

ミソラは廊下で待機している。

忘れていたがミソラは一日遅れで入学したのだ。

担任の先生が教室に入る。

「……それじゃあ、もう一人のメンバーを紹介するぞ」

はいつてこゝい。という先生の呼びかけでもう一人のメンバー・つまりミソラが入ってきた。

「ベイサイドシティからきました。響 ミソラです。よろしくおねがいします。」

クラスは一気に騒ぎ出した。
主に男子が。

「よしそれじゃ響の席は星河の隣りだな。仲良くしてやれよ！」
昨日からスバルの隣りは空席だったのだ。

「よろしくね！スバル君！」
「うん！こちらこそ！」

スバルは男子プラスルナの視線が、ミソラは女子からの視線が痛かった。

スバル「ロツクマン

その等式が皆に認知された時から元々のルックスも良い、スバルはさらに女子から好意的な眼差しを向けられるようになったのだ。

「…よくおもったらこのクラスすごくねえか？アイドルのミソラちゃんに地球を救った英雄のスバルがいるんだぜ」
ゴン太が言う。

「確かに…」

キザマロが相づちを打つ。

今日から普通授業で、スバル達は中学最初の授業を行い、給食を食べ、今は昼休みという名の地獄である。

なぜかは

「それで、どうして、私を置いて行ったのかしら!？」
ルナの説教タイムだったからだ。

スバル達は正座している。

「い、委員長が、怖かったから……」

「なんて!？」

「ひいつ!!」

スバル達は恐怖におびえていた。

ただ一人、ミソラを除いては。

ミソラは一人で“もう一つの目的”について考えていた。

「よし、今日こそ言おう!」

ミソラは決意の眼差しでメールを送った。

送り先は、星河 スバルー

ルナの怒りがいよいよ静まりかけた時だった。

急にスバルのハンターにメールが入ったのだ。

「あれ、メールだ。委員長！ちょっと待ってて。」

「あつ、ちよつと！」

「ごめん！すぐ戻るから！」
と言ってスバルは教室をでた。

「ええと、差出人は…ミソラちゃん！？」

なんと、メールはミソラからだったのだ、
内容は

放課後、屋上に来て！

というものだったのだ。

「なんかあったのかな、ミソラちゃん？」
スバルの頭に？が浮かんた。

第8話 隣の席のミソラちゃん（後書き）

次回、あのシーンがあるかも！？

第9話 空と月と流れ星

私は見てしまった。

星河君がミソラちゃんから受け取ったメールの中身を……

話はスバルが用事^{メール}で廊下にでたところに遡る。

スバルが明らかに不振な態度をとっていたのでルナは

「怪しいわね……追うわよ！ゴン太、キザマロ！」

そして半ば尾行するようにしてスバルの後を追ったルナたち。

途中、何度かあたりを見渡していて気付かれそうにもなったが何とかバレなかった。

そして、一階の玄関前で立ち止まったスバル。

「っ！止まったわ！物陰に隠れて……」

ちなみにもあまりにもみっともなかったのでゴン太とキザマロは逃げるようにして立ち去ったという。

そしてスバルはハンターのディスプレイからメールをみていた。

「あんなにそわそわするなんて、何か言えないような事でも書いてあるのかしら……まあ、この私に隠し事なんてさせないんだから！決して星河君のプライベートとかを知りたいとかそういう訳じゃないんだからっ！」

一人ツンデレを開始したルナ。

端から見れば滑稽だ。

「うるさいわね！作者！……何々…ミソラちゃんからのようね…放課後屋上にきて…まさか！」
勘のいいルナは気付いた。

放課後の屋上―そこは誰もいない未開の地―
誰もいない、ということはどんな事でもできるある意味解放的な場だ。

もちろんこっそりと何かの必殺技の練習（何だソレ）など

秘密の話―など。

「今時の中学生の男女がする秘密の話と言えば…まさかあの二人…いや…まさか…」
ルナは一人で一人で自問自答していた。
その時、

「あれ、委員長？何してるのそんなところで？帰りのHR始まっちゃうよ？」

「ひゃあっ！？…なんだ星河君ね…って星河君！？」

「…なんか委員長変だよ？具合は大丈夫？」
スバルお得意のスキル、お節介が発動した。

「な、なんでもないわよっ！！それじゃっ！」
といってルナは走り出した。

「どうしたんだろ？委員長？まああんだけ走ってるなら大丈夫か」
と言いつバルは教室へと向かった。

「……それじゃ今日はもう帰るとしようか。気をつけ！礼！解散！」
担任の教師がそういうと、生徒達は一斉にかえっていった。

「それじゃ、いこっか。ミソラちゃん」

「ノノっ、うん！」

ミソラはずっと顔を赤くしていた。

それを一部始終みていたルナ。

そして、スバル達が屋上に向かったのを見て。

「追っわよ…ゴン太、キザマロ」

またですかーっ！？という声もあったが気にせず二人を連れてルナ達も屋上に向かった。

屋上ースバル達はエレベーターの横にある花壇の近く、
ルナ達はゴン太に頼み（命令して）ウェーブロードの上にいた。
ウォーロックはハーブに連行された（笑）

『わらうなああ！』

あ、聞こえてた。

「……それでミソラちゃん、何の用事？」
スバルがミソラに問いかける。

「ノノ……スバル君……私……あなたの事が好きです！だから……お付き合いですてくささい！」

屋上にいる誰もが息を呑んだ。
特にルナの衝撃が一番だった。

そして屋上にいる全員の視線がスバルに集まった。

そしてスバルは、

「ノノノば、僕もミソラちゃんの事が好きでした！だから、僕の方こそよろしくお願いします！」

「ノノノっ！スバル君！ありがとう！」

ミソラはスバルにおもいきり抱きついた。

一方、ウェーブロードでは、

「スバル…うらやましいぜ…」

オックス・ファイアことゴン太が言う。

「ぼ、僕びつくりしすぎてもう腰が抜けちゃう所でしたよ！」

キザマロが言う。

そしてルナが何か言いかけた時、

オックス・ファイアの変身が解けた。

ルナ達はスバル達がいる屋上に落ちた。

「って、うわあ！い、委員長！それにゴン太やキザマロまで！」

「あれ、もしかして全部みてた？」

ゴン太は

「す、すまねえ、見ちゃいけないとは思ってたがつい……」

キザマロは

「右におなじです……」

途端にスバルとミソラの顔が赤くなった。

「ノノノだ、誰にも言わないでね？」

と、スバル

「私は言ってもいいけどね」

と、ミソラ

「…アンタ達、私の事忘れてない？」

あ……

皆忘れていたようだ。

「まあ、いいわ。今回は私がゴン太に頼んで無理矢理やらせたことだったし、…それにスバル君！ミソラちゃんと付き合っただったらそんなにウジウジしないでもって胸を張りなさい！ミソラちゃんとつき合えるのはアナタしかいないんだから！」

「わかった。…ありがとう委員長」

「／／ふ、ふんっ、わかってくれたらそれでいいのよ！」
そういつてルナは一人でエレベーターにのっていつてしまった。

「ミソラちゃんには言わなかったけど私はまだあきらめないわよ！隙ができたらずぐいただいちやうんだからっ！」
ルナは無人のエレベーターでそう決意した。

第9話 空と月と流れ星（後書き）

スバミソなのにほとんどルナ視点という（笑）

番外編などで完全スバミソ視点の告白をいずれ書こうと思います。

ロックとハープの事も気になりますしね。

では、今回はこのあたりで

第10話 忘れかけてたアレ（前書き）

久々の投稿です。

ネタはあるけど相変わらず文才はありません。

第10話 忘れかけてたアレ

突如、スバルのハンターが鳴った。

今は4時50分。

通常、部活などが無い、俗に帰宅部と呼ばれる生徒達はもう家路についている時間帯だ。

だが、スバル達―

ミソラ、ゴン太、キザマロといったメンバーはまだ校舎内にいた。理由は―前話を読めば分かるだろう。

電話の相手は、僕らの委員長こと、白金ルナだった。

「あ、委員長からだ」

そしてスバルはディスプレイを表示する。

「も、もしもし!!」

ルナが電話にでる。

前回、あんな事があったからか声がうわずっている。

「委員長、どうかしたの？」

「あなた達、何か忘れてない？」

急にそんなこと言われても知る由もない。

と言わんばかりにハンターを取り囲んでいる4人は怪訝そうな顔をする。

『ミソラちゃんとはかく…ほかの3人はなんで覚えていないの！』

「まあ、私も作者も忘れかけてたけども！」

ここでは作者の名は出さないでくれ。せめて後書きで。

『土曜日、ヤシブタウンの遊園地に行く事よ！』

「あー！」

皆驚きの声をあげる。

ミソラを除いて。

「ヤシブタウンの遊園地？聞いてないよ、スバル君？」

「ご、ごめん！ミソラちゃん！色々あつてすっかり忘れてた！」

そしてスバルは話の経緯をユーモアを交えて：「いや、交えてないから」失礼。普通に話した。

「ふーん、そういう事だったんだ」

と、ミソラは納得した。

『とにかく！今週の土曜日！正午にバス停までに集合！分かった！？』

ハイー！！

と全員で言う。

そして皆と別れてからスバルとミソラの二人は家の前まできていた。

「ねえ、スバル君」

ミソラが口を開く。

「何？ミソラちゃん」

「日曜日さ、一緒にデートしない？」

「ノノで、デート！？」

スバルの顔は真っ赤だ。

「いいじゃん、私達もう付き合ってるんだし。……それとも、スバル君は私とのデートは嫌なの？」

ミソラは上目使いと涙目になっている。

「ノノそ、そんなことないよ！！それに僕だってミソラちゃんと出かけたし！」

「本当！？だったら日曜日、ロッポンドーヒルズの映画館に行こう！」

「うん！……ちなみに何の映画？」

スバルは以前、ロッポンドーヒルズの映画館に行ったことがあるが、そこで見た映画はスバルの苦手とするホラー映画・ゴーストクライシスというものだった。

「えーっと……確かゴーストクライシス2って奴だったかな？」

「あ、あれの次回作あったの！？」

スバルは身震いしながら言った。

「前からCMとかでやってて前評判はかなりいいらしいよ？……も

しかしてスバル君、お化け怖い？」

本当は、怖い。

だが流石に女の子の前でお化けが怖いだなんてスバルは言えない。
好きな人の前ではなおさらだ。

「べ、別に大丈夫だよっ！僕に怖いものなんかないから！」

「ふ、ふん……（ツンデレ？）」「
なんて思っミソラだった。

第10話 忘れかけてたアレ（後書き）

次回はキャラ崩壊の可能性が高いです。

もしかしたらもう既に崩壊しまくってるかもしれませんが。

番外編 スバミソでエアーマンが倒せない1

スバルとミソラはWAXAに来ていた。

「そういえば、WAXAに行くのも久しぶりだな」
スバルが言う。

「そうだね。最後に行ったのは… 暁さんが見つかった時以来だから… 2年前かな？」

ミソラは2年前を思い出しながら言う。

何故、2人がWAXAに来ているのかと言うと、暁に「見せたいものがある。すぐにWAXAにきてくれ」と言われたからである。

「見せたいものってなんだろうね？」
スバルが言う。

「ひょっとしたら新しい武器かもな！」
ウォーロックが目を輝かせて言う。

「ポロン… 相変わらずガサツね」
ハープがウォーロックを挑発する。

「何だとハープ！」

「本当のことを言っただけじゃない」

「なんだとおおお！」

ウォーロックは怒りだした。

「止めなよ、ロック……ウィザード・OFF!」

「ハープも悪いよ!ウィザード・OFF!」

2人はそれぞれのパートナーをハンターに戻した。

そして2人は正面玄関からWAXAの中に入った。

2人は以前、サテラポリス遊撃隊に所属していたので指紋認証さえすれば簡単に入れるのであった。

「お!スバル、ミソラ、来たか!」

サクサクサクとうまい棒を食べながら自称・ヒーロー、暁 シドウが挨拶をする。

「おはようございます。暁さん。」

スバルは礼儀正しく挨拶をする。

「おはようございまーす。…相変わらずうまい棒ばかり食べているんですね…」

ミソラは半分呆れながら挨拶をする。

「いやー、コレだけは止めれないんだよ。」

暁はWAXAの制服からまるでマジシヤンの如く大量のうまい棒を出す。

「ハハ……ところで暁さん、僕たちに見せたいものって…まさかそのうまい棒の山じゃありませんよね?」

スバルは冗談を交えて本題に入ろうとする。

「そんな訳ないだろう!お前達に見せたいのは……これだあっ!」

暁はディスプレイから何かを映す。
それは、どこか素朴な、それでいて青い体をしたロボットのような
ものだった。

「これは…一体？」
スバルが問う。

「これ…少しだけロックマンに似てない？」

「その通り。これはロックマンEXEよりも前のロックマンだ」

「EXEの前の…」

「ロックマン…」

「ていうかそんなに昔からロックマンっていたのですか？」
スバルが言う。

「ああ、後、このロックマンは一番最初の初代^{ファースト}ロックマンって奴だ」

「へえ…ちなみにそれは僕たちと何の関係があるんですか？」

「ああ、これからお前達には鈍った身体の鍛え直しを兼ねてこの初
代ロックマンの電腦に入ってその世界の敵と戦ってもらう。ちなみ
にバトルカードは使えない。最初はバスターだけで戦うんだ」

「どんな敵がいたんだろう…！？」

『へへっ、腕になるぜ！』

「がんばろっ、スバル君！」

『足、引つ張らないでよね』

「よし、準備はいいか？それじゃ、行つてこい！」

そしてスバル達は初代ロックマンの電腦に入った。

「ここが、初代ロックマンの電腦……」
ロックマンが言う。

「あ、見て！スバル君！」
ハープ・ノートが何かを指さす。

そこには9個のマスがあつた。マスにはそれぞれロボットの絵が描かれている。

「ひょっとして……この絵の中のロボットがこの世界のボスなのかな？」

「なのかもね」

と、ハープ・ノートは一つの絵に触れる。
するといきなりハープ・ノートは絵の中に吸い込まれてしまった。

「えっ！？ちよつと！？きゃあああ！」

「ミソラちゃん！？」

そして、スバルは絵の中に飛び込んだ。

その絵に描かれていた者の下のほうには、AIRMANと書かれていた。

番外編 スバミソでエアーマンが倒せない1（後書き）

日常編のストーリーが僕の中で節目を迎えたら、この番外編シリーズを投稿しようと思っています。
なので次回は日常編です。

ではまた次回！

第11話 計画通り・前編（前書き）

皆さんお久しぶりです！

ちよつと今までとは違った文章にしてみました。

どちらかと言うと閃光輝器風な書き方ですので無駄に理屈っぽく理屈になっていない、屁理屈文章になっています。

以前までの文章が好きな方は感想などで書いて下さい。

基本、このような書き方にしようと思っているので。

第11話 計画通り・前編

時はかなり進んで土曜日。

今日はルナ達とヤシブタウンに出来た遊園地に行く日だ。

今は午前7時。

待ち合わせの時間にはかなり余裕がある。

今日のスバルは珍しく、“1人”で起きた。

周りには起床を邪魔するものは何も無い。ただ“1人”で起きた。そして、

“1人”という事はそこにはいつも一緒に寝てるミソラの姿も無いのだ。

彼女はスバルが目を覚ます頃、必ずと言っていいほどスバルに抱きつきながら眠っている。

当然、スバルは身体に自由が無くなるため、動く事は不可能である。しかし、ミソラを起こすわけにもいかないのです、とりあえず起こさないよう、ミソラの腕を解こうと努力する。

が、毎日のように重たい楽器を持って、アイドルとしての活動に明け暮れていたミソラの腕は意外にも力が強く、そう簡単には解けない。

やがて、スバルはミソラの寝息や寝顔、その他もろもろに負け、再び深い眠りに落ちてしまい、寝坊をしてしまう。

それが最近のスバルの日常なのだ。

しかし、今日は違った。

“いつもはそこにいるであろう” ミソラがそこ——つまりはベッドの上に居なかったのだ。

当然、スバルは前述の努力をする事なく、“一人”で起きられたのだ。

何故そのような事が起こったのか——
そして昨晚へと時間を遡る。——

スバル side . . .

僕は展望台にきていた。

もちろんミソラちゃんと一緒に。

何があったか見る前に先に僕の短所について説明しておこうか。

まあ簡単に言っちゃえば、星とか宇宙に関しては“他の物が気にならなくなる”ぐらい熱中してしまうこと、だ。

人の言葉も“気にならなく”なるぐらい、ね。

その僕の短所が災いして今回みたいな事が起こってしまったんだ。

ここは夜の展望台。

僕にとつては宝物庫のような場所だ。

とりあえず、一旦語るのを止めてその日、何があったのか一部始終を思い返そう。

本当に、僕は愚か者だ。

side out . . .

スバルとミソラは2人で展望台にきていた。
今日は満天の星空だ。

絶え間無く、星達が輝き続けている。

「スバル君、今日はとっても綺麗な星空だね。」

「うん、そうだね!」

「ねえねえスバル君、あれ、なんて言う星?」
ミソラは空を指さしながら言う。

「ああ、あの星はね……………って言うんだよ」

「へえーそうなんだ。じゃああれは?」
次々と質問してくるミソラ。

だがスバルにとって星について説明するのは赤子の手を捻るようなもの。

ミソラが質問してきた星は全て即答できた。

やがて、ミソラは質問を止め、静かに星を見ていた。

そしてスバルは考えごとをしながら星空を眺めた。
もちろん、考えている事は星に関する事だ。

やがてミソラは、
「スバル君!あの星座ってなんて言う名前なの?」
と質問した。

だが集中しているスバルの耳には何も聞こえていない。
返答は

「……………」
のみだ。
つまり無言だ。

「スバルくん？おーい？」

スバルには届かない。

しかし、ミソラは怒ることなく、まあ、いつもの事が、とスバルの性格を理解していた。

「ねえ、ハープ？ちょっと相談があるんだけどいい？」
ミソラは何やら悪戯っぽい笑みでハープに訊ねる。

『どうしたの、ミソラ？』
ハープがウィザード・ONする。

「あのね、……」
「……」

『そういう事ね！うふふ、スバル君、ビックリするわね』
ハープも悪戯っぽい笑みを浮かべる。

もちろん、スバルには何も聞こえていない。
何一つ、も。

せーの、

「スバル君のバカ！！もう知らない！」
とスバルの耳元で叫ぶミソラ。

そして、あたかも怒っているかのような態度をとって家に帰るミソラ。

「えっ？ちょっと待ってよ！！ミソラちゃん！！」

慌ててミソラを呼び止めようとするスバル。

だが呼び止めようとすればするほど、ミソラにとっては都合の良い展開になる。

計画通り。

その台詞を頭に浮かべ、悪戯っぽい笑みを浮かべるミソラ。

当然、怒りなど全く感じていない。

ミソラが一足早く家についた後、スバルが帰宅したのはその十分後であった。

茜にミソラが怒って部屋に入ってしまったという情報を得て、スバルも自分の部屋に行く。

何もミソラの事に関して、怒られなかった事はスバルの頭には無かった。

それにスバルが気づいていたら――

ミソラの計画は破綻した可能性もあるがそれは既に過ぎた事だ。

ちなみに、十分という時間は、茜をミソラの協力者にさせるのにはミソラにとっては充分すぎる時間だった。

後編に続く――

第11話 計画通り・前編（後書き）

ミソラ「ミソラの計画は徐々に進行スピードを増していた。次々とミソラの計画に荷担していくかつての仲間達――絆を信じてきたスバルはやがて――

次回、流星のロックマン peace あらがえない運命」

スバル「……何してんの？ミソラちゃん？」

ミソラ「次回予告♪」

この次回予告はフィクションです。

第12話 計画通り・後編

階段を駆け上がり、ようやく部屋の前まで辿り着いたスバル。

しかし、扉には鍵がかかっているため、部屋に入る事は不可能だった。

ミソラを怒らせてしまったのは自分だという思いはとても重いもので、気づいたら、スバルは土下座をして謝っていた。

「ごめん、ミソラちゃん。君を無視するつもりは無かったんだ」

分かってる。そんな事は。

スバル君は星の事になると周りが見えなくなることも。

本当はこんなに謝ってほしい訳じゃなかったんだ。

ほんの少し、イタズラしたかっただけなんだ。

本当は、謝らなければいけないのは、私なんだ。

そして、ミソラは目の前で謝っているスバルを見ながら言う。

「……ごめん、スバル君」

ミソラは扉を開けて、スバルと同じ様に土下座する。

「……………え？」

思わずポカンと口を開けるスバル。

「ホントは私…全然怒ってなかったの……ただ、ルナちゃん達と遊

園地に行く前日に、二人で出かける為の口実を作りたかった私のワ
ガママだったの！」

必死で謝るミソラ。

本気で謝っていたスバルを見て、申し訳なかったのだろう。
今回の“計画”の事まで全て語った。

きつと、怒られるだろうな。

そう思っていたミソラはある意味覚悟は出来ていた。

それでスバルを責めるなどもつての外だ。

完全に、自業自得だったからだ。

しかし、スバルは

「なんだ、だったら言ってくればよかったのに、二人で出かけた
って」

え？とミソラはポカンと口を開ける。

「僕、ミソラちゃんと出かけたくないって言っただけ？」

確かに、言っていない。

言われたらミソラはショックで本当に部屋にこもる事態になっ
てい
るだろう。

「言っていないでしょ？だったら僕がミソラちゃんと出かけた
くない
訳無いじゃないか」

スバルの言っていることは正論だ。

行きたくないと言ってないから行きたくない訳がない。
小学生でもわかることだ。

だがそんな簡単な理論は、ミソラにとってはとても嬉しいことだったのだ。

「うつ…スバル君…ひつく……」

気づいたら、ミソラの目には涙が溜まっていた。

「あれ？ミソラ…ちゃん？」

ミソラが泣いている事に気づいたスバルは驚いてオロオロしていた。

そんなスバルの胸に抱きついたミソラは幸せそうな笑みを浮かべながら泣いていた。

結局、色々スバルの事をまだよく知らなかったミソラ。

自分がミソラを不覚にも無視してしまい、しかもミソラの気持ちに気づいてあげられなかった二つに愚かさを感じているスバル。

どうやら意外と二人はお互いの事をまだ知らない事が多かったようだ。

第13話 ショッピングへ

委員長こと白金ルナが提案した遊園地へGO！はいよいよ明日へと迫っていた。

そんな中、スバルは自分の部屋で身なりを整えたりしていた。

今日はミソラとショッピングに行く予定なのだ。

ミソラはショッピングと言っではいたが、付き合っているカップル同士がショッピングに行く、というのは言うまでもなく完全にデートなのだ。

流石にデートとなると、やっぱりファッションにも気を配らなくてはならない。

スバルが着ている服は赤いチェックのジャケットにジーンズを履いている。

結構似合っている服装だった。

一方、隣の部屋ではミソラが同じように着替えていた。

作者があまり女物の服に詳しくないので詳細は上手く語れないが、いつも着ているパーカーとは違い、ピンクのブラウスやスカートなどで少し大人びた印象を受けた。

ホント、スミマセン。

スバルとミソラは同時に部屋からでた。

「あ、ミソラちゃん」

気づいた瞬間、スバルは思わず見とれていた。

同じくミソラもスバルの格好に見とれていた。

二人共、普段とは違う雰囲気の格好なのだ。

かつこよさやらかわいさやらが2〜3割増し位されているように見えるのだろう。

二人の時間は止まっているようにも感じた、が、地球の自転が止まることがなければ、公転も止まることも無いわけで、つまり何をいいたいのかと言うと、時間も止まるわけがないと言うわけでなんだから二人の時間は動いていた。

「じゃあ…行こっか？」

ミソラが沈黙を破る。

「そうだね！」

スバルもうなずく。

二人がやってきたのは先日オープンした遊園地でかなり賑わっている、ヤシブタウンだ。

「うわぁー…すごい人だね」

スバルは辺りにいる人、人、人の人混みを見て感想を呟く。

「そうだね…… あー！あれは！！スバル君！早く行こっ！」

ビューン！という擬音が完全に当てはまる程のスピードで駆け出すミソラ。

「あ、待つてよー！！」

完全に置いて行かれたスバル。人混みをかき分け、やっとの事でミソラの入った店に入る。

「ふう〜…… やつと入れた……この店は？」

見れば、ギターやらドラムやらベースやらがたくさん置いてあった。どうやら楽器店らしい。

ギターの弦などを取り扱っているコーナーにミソラは居た。

「ああ、居た。ミソラちゃん？」

スバルはミソラに声をかける。

「あ！スバル君！」

「ギターの弦を見てるみたいだけど……切れちゃったの？」

「ううん、でも、長い間使っていたからね…錆び付いちゃってあまり良い音もなくなっちゃう前に、と思って」

「そうなんだ」

と、スバルはふと弦コーナーの横にあったギターピックのコーナーに目を向ける。

色とりどり、形も様々なピックがたくさんある。

そんな中、スバルは自分の着けているペンダントよりも少し丸みを帯びているため、意外と使いやすいそうなピックを見つけた。

「（僕、ギターとかやらないけどミソラちゃんなら使うかな？）」

そしてスバルは青とピンクのピックを一つずつ買ったためにレジへ向かった。

その後も、洋服屋に行ったり、雑貨屋に行ったりなどしてー

気がついたらもう、夕方になっていた。

「暗くなってきたし、そろそろ帰ろっか？」

「そうだね。……あ、ミソラちゃん！これ。最初の楽器屋で買ったんだけど……どうかな？」

スバルは楽器屋で買った二つのピックの内、ピンクのピックを渡す。

「わっ！かわいい！あつ、コレ、スバル君のペンダントの形に似てる！！」

「気に入ってくれてよかった」

「うん！ありがとうね！スバル君！」

ミソラは今日一番の笑顔を見せた。

第13話 ショッピングへ（後書き）

折角のデートの話が、短いなんて……

第14話 ルナルナ団、遊園地へ

さあ、今日は待ちに待ったルナルナ団・中学生編初企画・遊園地へGO!!大作戦の決行日だ。

前日に

『いい！？余計な荷物は全部もってこないように！必要最低限の物だけでもってきなさい！ゴン太は間違っても牛井を持ってこない事！いいわね！！』

という電話がルナからかかってきた。

あれだけ釘を刺されたのだ、さすがに今回ばかりは牛丼事件が起こる筈がない、と一同は考えていたのだが、

「全く……おそいおそいおそいおそいおそいおそいおそいおそい
 そいおりおそいおそいおそいおそいおそいおそいおそいおそいお
 そいおそいおそー！ー！！！」

委員長ことルナの怒号が響いていた。

「キザマ口君……今ルナちゃんが言ったおそいの数は……？」

「お任せください！今言ったおそいの数は……21回です！！」

「いや……キザマロ!!それは間違っている!委員長は一回だけ“おろい”と言っている!!これは引っかけだ!なので正解は20回!!」

「引つ……引っかけですとおおおお!!!!」

「ふふふ……計画通りね」

「ル……ルナちゃんライトが月君に!!」

「まさに月!」

なんて漫才を繰り広げられている間にも、ゴン太は来ることはなかった。

「しかし、ゴン太君もなかなかきませんねー」

「あれじゃない? 今ごろ牛井に埋もれているとか?」

「それはないとおもうよ……ミソラちゃん……」

「冗談だよ……この際だから皆で向かえに行こっか?」

「ええ、そうね。“お迎え”にあがりましたよ。……私たちが迎えるまでも無くなっちゃうかもしれないけど……」

「オヒュカス・クイーン再来!？」

確かに、ミソラの言うことも案外的を得ていて、ルナの言うこともあながち間違いではなかった。

皆が向かえに行った筈の牛島、ゴン太の部屋に居たのは――

牛井に顔を突っ込みながら、ピクリとも動かないゴン太の姿がそこにあった。

「くっ…ゴン太ああああ！！！」

「きゃああああ！！！」

悲痛な叫びが、部屋を包み込む。

そんな中、ウォーロック達、ウィザードは、

『おい！オックスの電波反応も感じねーぞ！』

『ポロン…かなり厄介な状況になったみたいね…』

『まったく！アイツ等は本当に毎度毎度…』

その頃、スバル達は、

「くっ…ゴン太……」

「こんな死に方って……アンマリですよ……」

「いや、死んでねーから」

ゴン太が死に方という言葉に反応して目を覚ました。

「良かった……ゴン太が目覚めて」

「良くなーい！！そもそもなんでゴン太はあの状態で寝てたのかを説明しなさい！！」

「なんでって……夕飯食べてたら寝ちまったんだよ」

はい、解決。

『さて！じゃあお前、オックスはどうしたんだ？』

久々登場ウオーロック。

この小説は本当にウィザードの存在を忘れられる確率が高い。

「はい、そういうのは後書きでやって……ってかロック、オックスの電波とかも確認出来なかったの？」

『ああ。ちなみに、ハープも感じてないらしいぜ』

「そっか……ねえゴン太、

ハンターはどこ置いたの？」

オックスはウィザードである。

そして、ウィザードは基本、ハンターV.Gという携帯端末の中に存在しているのだ。

ならば、オックスはゴン太のハンターに入っている、と考えるのが妥当だが……

「ハンターか？だったら、あそこの山に……」

と、ゴン太は脱いだ服などが散乱して、文字どおり、山のように溜まっているベッドを指さして言う。

「アンタ……少しぐらい片づけなさいよ……」

「確かに……」

「面目ねえ……」

と、服の山からハンターを取り出しながら言う。

「ゴン太君……それ……」

「充電切れ……ですね……」

『ポロロン……通りでオックスの反応が無いわけね』

皆、完全に呆れてしまっている。

しかし、そんなゴン太に構ってられる時間も無いわけで、

「皆！とつとバスに乗り込むわよ！！」

「「「さんせーい」「」」

「えっ、ちよっ……俺は」

「さあ、レッツゴー」

ルナルナ団（-1）、遊園地へ。

第15話 流星争奪戦（前書き）

あんだけ引っ張っておいて今回の話はとても短いです。

うん、こんなスバルを書きたかっただけなんです。

第15話 流星争奪戦

その後、着替えて、充電も終わらせて、電波変換して猛スピードで飛んできたゴン太と合流し、ルナルナ団・1の・1が取れたところでルナルナ団が全員集合した。

メリーゴーランドやジェットコースターなど、定番のアトラクションをクリアしてから、ルナは、

「それじゃ、この時間からは、各自自由行動ね！！好きなように過ごしなさい！但し、五時までにここに集合！いいわね！！」

相変わらず？マークがない喋り方だった。

自由行動、と聞いて目を光らせたのは、勿論ミソラだった。

そして同時に、自由行動を提案と同時に確定させたルナにも目を向ける。

油断は、できない。

そう思った瞬間、ミソラはスバルに近づき、

「スバル君っ！！一緒に見て回ろっつ！！」

「い……いいけど（すごい剣幕……）」

先手必勝、と言わんばかりに勝ち誇った笑みを浮かべるミソラ。

それを試合開始の合図と受け取ったルナは負けじと、

「星河くんっ！！これは命令よ！！今日は私と回りなさい！！」

と、無理矢理にも程がある命令を下すルナ。

完全に修羅場となったこの空間で、完全に蚊帳の外となっているゴン太とキザマロは、遊園地のグルメコーナーの全メニュー食べ歩きをしていた。

いくらなんでも自由過ぎる行動を共にしていく中、

キザマロが2軒目辺りでギブアップしたのはいうまでもない。

ちなみに、ルナとミソラは相変わらずあーだ、こーだ、と言い争いをしている中、スバルは一人、何とかこの状況を、平和的に終息させる術を模索していた。

（どうしよう…僕が何とかしないと……）

と、ここで一つの名案が浮かんだ。

「じゃあさ、3人で回らない？」

瞬間、場の空気は一変して変化した。

ミソラとルナ、二人は全く同じ事を考えていた。

（……空気読めよ）

「ルナちゃん。私たち二人で遊園地を楽しみましょう」

ミソラは笑顔のまま、言った。

只、その笑顔は決して楽しい笑顔ではない。

同じくルナも、

「そうね、星河くんはほつといて、二人で楽しみましょう」

笑顔だった。

一人、取り残されるスバル。

「なにをー間違っただんだろうか」

一人寂しく佇むスバルに、さっきまでダウンしていたキザマロと、片手にソフトクリームを持っているゴン太が、ポン、とスバルの肩を叩いた。

その音は、とても寂しい音であった。

第15話 流星争奪戦（後書き）

改めて言いますが、おそらくこの遊園地の話は、第二話あたりから検討していた話で、番外編含めて、約十話程引っ張っておいた話です。

それがこんな短い話になってしまい、読んでくださる読者様が拍子抜けしてしまう内容だったと思います。

その点は非常に申し訳ございません。

次回以降は、読者様を満足させられる出来の話を作っていきたいと思います。

ちなみに、流星のロックマン peace、前編・完結。

第16話 夏休み、到来

うだるような熱気と、我々に光の恩恵を与え続けている太陽に少し休め！と言いたくなるような気分^{気分}に駆られる季節がある。

言うまでも無く、夏である。

つい先日まで、こんなに降ってりや、水不足なんてあり得なくね？と思うほど泣きまくっていた空に、今度はやけにハイテンションになっているな、と思わず突っ込みたくなる季節でもある。

そんな季節には、全国の学生さんが、学校という名の勉強を無理強^{無理強}いさせる空間から解放させる、超ビッグイベントが待っていた。

夏期長期休業、即ち、夏休みであった。

そんな夏休み前日であり、ある意味、夏休みの始まりでもある今日、七月三十一日は、いつもは長く、何人かの犠^犠牲者を出す校長先生の話も、皆、太陽共々ハイテンションなため、保健室送り^{きせいしや}の者はでなかった。

一学期最後のHRが終わり、皆、夏休みに何をするか、の計画を練ったりしている中、当然、ルナルナ団（正確には団長）が黙ってはいなかった。

「ルナルナ団全員で海に行くわよ！！」

と、時々突拍子も無いことを言い出す、我らが委員長、白金ルナが、

夏休みに何をするか、の提案を持ち込んできた。

最も、その提案は、提案ではなく、ルナの口から話された途端に、確定事項となる。

いや、その提案を思いついた時点で、確定事項になっているだろう。

しかし、あまりにも突拍子ではない案に関しては、大体ルナの考える案は、皆の理想的な物であり、また、断る理由も無いので、皆はOKを出す。

今回の海に行く案も、この暑い日には、是非行きたいものなので、例により、皆、OKサインをだした。

「それじゃ、一週間後にシーサーアイランドのビーチに行くわよ！各自、水着を持ってくる事！忘れたら浜辺に放置するからその覚悟で来なさいよ！！」

話は変わってスバルの家。

終業式で今日は午前中に学校が終わったため、スバルとミソラは家に帰っていた。

これまで語らなかったが、終業式には、夏休みに入る前に、生徒が必ず、一喜一憂するものが渡される。

成績表だ。

元々、スバルはキザマロやルナには及ばないが、勉強もそれなりにできて、交友関係も多いので、ある意味、学校の模範的生徒なので先生方にも一目置かれているので、成績表はかなり良かったのだが……

問題なのはミソラだ。

アイドルとしての活動が中心だったため、これまで勉強を疎かにしていたミソラは、中学での勉強に着いていける筈も無く、成績は酷いものだった。

「うう……勉強は苦手……」

がつくりと肩を落とすミソラ。

そこで、スバルは一つの提案をだす。

「だったらさ、夏休みの間、少しずつ勉強をやり直してみたら？ 僕も手伝うしさ」

その台詞に思わずミソラは、

「うう……ありがとう、スバルく……ん……」

とスバルに抱きついていた。

その行為と好意に、スバルは顔を赤くしたのは言うまでも無いが。

ちなみに、スバルとミソラが二人になっている時は決まってウォーロックとハープは姿を消す。

理由は……言うまでもないだろう。

とにかく、サンサンと降り注ぐ太陽の光の下、コダマタウンの夏休みが始まるうとしていた。

第16話 夏休み、到来（後書き）

ルナが何か提案するときの喋り方と、某SOS団の団長の喋り方が酷似していると思う今日この頃。

第17話 夏の漢牛丼

夏休みやGW、冬休みなどの長期の休暇や祝日などは店などが。キャンペーンや××限定販売、などといった特別販売などが多くなってくる。

現在、ゴン太、キザマロ、スバルといった、ルナルナ団の男メンバーの目の前にある店も同様だ。

キザマロとスバルだけなら何の店かは、あまり想像がつかないが、この男、牛島ゴン太がいる場合は、別だ。

そんな無類の牛丼男が向かう店は、一つしかない。

牛丼屋だ。

この牛丼屋は、夏休みの期間中、おひいけふ漢牛丼キャンペーン、というものをやるらしい。

そのキャンペーンに目を奪われたゴン太は、折角の夏休みなのでルナルナ団全員を呼んで牛丼パーティーを開こうと考えていた。ある意味、ゴン太なりの配慮とも言えよう。

だが、スバルとキザマロは、OKを出したが、ルナはあまり牛丼を好まないらしく、ミソラは乗り気だったが、その日は海に行くための水着をアカネと共に買いに行く予定が入っていたため、断念した。

そもそも、漢牛丼、と書いているのに女性を呼ぼうとしたゴン太はその点に関しての配慮がまだ足りていなかった。

「それより、この漢牛丼キャンペーンって一体どういうものなんでしょうか？」

『何か、嫌な予感がするのは俺だけか？』

『ブロロロ…いいじゃねえか！俺様はどんな牛丼でもドンと来い！だぜー！』

「わかったから、勝手に出てこないでよ……ウィザード・オフ！」
これ以上放っておくとうるさくなりそうだったので早めにウィザード・オフさせておいた所で本題に戻る。

「この店の店長が作る、熱さとウザさを兼ね備えた超一品！！って書いてあったぜ」

「何だその曲がりに曲がった評価は！」

と、思わずつつこむスバル。

ウォーロックの言っていた嫌な予感が当たりそうな予感がして、思わず戦慄するスバルとキザマロだった。

当たってしまった。

嫌な予感、というものは本当によく当たるものだと思ったスバルとキザマロは改めて目の前に出された牛丼を見た。

問題の根元は、肉にあった。

普通の牛丼の味付けにプラス、キムチと納豆、更には、隠し味には山葵といった、見るからに辛くて、ねばねばしそうな見た目だった。

確かに、熱くて、ウザそうだ。

そもそも、隠し味の筈が全然隠れていない。むしろ全面にでてきてしまっている。

しかし、最強の牛丼男は、

「こんな旨そうな牛丼、初めてだぜ!!」

と、いただきますもいう事なく、いきなり牛丼を口の中にかき込んだ。

「い……一体……」

「味の方はどうなのでしょう……?」

果たして、その味とは――!?

「――旨い!!」

「「嘘お!!?」」

どうやら美味しかったらしい。

しかし、この見た目の牛丼だ。

旨いと言われてそう簡単に手を出せるわけがない。

そこで、キザマロが意を決して、

「僕、食べます!」

と言った。

その姿に感化されたスバルは、

「僕だって!いただきます!」

と、二人共、豪快に食べた。

その味は――!!?

「う、旨い!!」

「おいしいです!!」

二人共、美味しかったらしい。

「納豆のネバネバ感とキムチと山葵のハーモニー……」

「それは、豪快に、一気に食べなきゃ出ない味さ」

と、謎のおじさんが出てきた。

「あ、あなたは!？」

「俺は、この牛丼屋の店長だ!よろしくな!」

「店長さん、ですね!」

「その通り!どうだ?熱くなつてこないか!？」

「確かに……身体の下から熱くなってきたぜ……」

「そう!それが漢牛丼のパワーだ!」

「な……何だか無性に叫びたくなってきました……」

「僕もだよ……ああ、我慢できない!」

「さあ、その熱い思いを元気の無い人達に向けて叫んでみる!せーの!……」

「「「もつと!!熱くなれよおおお!!!!!!」」」

それは、食べた人まで熱く、ウザくさせる牛丼。

その効果が切れるには、丸一日かかるという。

第17話 夏の漢牛丼（後書き）

料理ってよく分からない。

第18話 急すぎる幕引き

終業式の日、委員長ことルナが計画した一つのプラン。

それは、海に行く事だった。

漢牛井のウザさが抜けきった男3人はシーサーアイランドの浜辺で着替えていた。

「…あの、“奥義”を使って。」

「ゴン太……本当にやる気かい？」

「おうよ！……ここで止めたら男が廃っちまう」

「前回みたいな失敗は許されませんよ」

『…何こいつら熱くなってるんだ？』

「それじゃあやるぞ……」

「うん……」

「はい……」

『…コイツ等まだ牛井効果残ってるじゃね？』

それじゃあ、とゴン太が音頭を取る準備をした。

「・・・秘技、パンツ破り・・・」

ズバンッ！とキレイのいい音になった。

それは、勢いよくパンツを水着から取り出した音。元々細身のスバルとキザマロだから為し得る速さなのだが……

コダマ小一の巨漢、牛島ゴン太は違った。

持ち前の肉体により、既にパンツのゴムが限界を迎えていたのである。

それで無理にパンツを引っ張ったのだから、

・・・そこに待ち受けるは、

一つの暴走・・・

何がどうなったのかは言うまでも無いだろう。

ただ、一人の少年は帰るとき穿いてない状態になるだけなのだから
- -

「とまあ馬鹿馬鹿しいモノローグは放つといて……今日、明日泊まり掛けで目一杯楽しむわよ!!」

馬鹿馬鹿しい言うな。

「えへへ……スバル君…この水着、この前買って来たんだけど……どうかな?」

ミソラが着ていたのは、白を基調としたフリルがたくさんついている水着だった。

その姿は、

「うん!とっても似合っているよ!ミソラちゃん!」

「へへ……ありがとうノ」

それから、皆でビーチバレーや西瓜割りなんかをやった。

ゴン太なんかは西瓜を割るところかパンツを破ったけどね。

うん、あんま上手くないや。

普通の僕ならもっと上手い洒落を言っただけど……きっと心が昂^{たかぶ}つていたんだろう。

スバル
昂だけに。

いけないや、これじゃ在校生にも、示しがつかないや。

せっかくの最後の日、格好良くいなくちゃ。

三月三十一日、僕たち、コダマ中学校三年生は、卒業します。

第18話 急すぎる幕引き（後書き）

すべては最終話で明らかになりますが……

先に言います。

この物語の終盤は、作者である僕があまりにも無責任であるために起こってしまった、いわゆる事故です。

後一話、後一話だけ僕の引き起こした事故に付き合ってください。

とりあえず、この話で言える事はそれだけです。

次回、最終回。

最終話 平和・peace・ピース

中学生になって、“僕のまわり”の世界は平和になった。

でも、あくまで、僕の周り、だけだ。

僕は、もっと広い、もっと大きな、“僕の知らない世界”を知りたい。

それは、地球全体で考えるだけでは無く、宇宙全体を含めてだ。

ロックと出会う前の僕は、それこそ、“自分だけの世界”しか知らなかった。

殻に閉じこもり、周りとの接触を極限まで絶った、“自分だけの世界”を。

だけど僕は、“絆”を知った。

何よりも代え難く、何よりも暖かい、“絆”を。

それから、だね。

僕が、“自分の知らない世界”を“自分の知りたい世界”に変えたのは。

だから、僕は父さんと同じ夢、“宇宙とブラザーバンドを結ぶ”夢を追う。

だから、もつと勉強するんだ。

コダマタウンを、離れてでも。

父さん、母さんはちゃんと納得してくれた。

ミソラちゃんは、泣いていた。

僕も、泣いていた。

別に、永遠の別れになるとか、そういうものじゃないけど、ただ、離れることが惜しかった。

今日は、このコダマタウンを去る日だ。

心残りは、あった。

正直言っと、去りたくは無かった。

高校も、近辺の所に入学して、皆と楽しく過ごしたかった。

でも、あくまで僕がこの道を進むと決めたのだ。

そう思い、改めて“自分の知らない世界”を知るための第一歩を踏みだそうと、決意を露わにした。

コダマタウンの駅前。

父さん、母さん、委員長、ゴン太、キザマロ、そして、ミソラちゃん、僕を見送るために、駅で集合していた。

皆、笑ってくれていた。

月並みだが、けっして二度と会えなくなるのでは無く、またいつか会えるのだ。

だから、今度は僕もミソラちゃんも笑っていた。

「ねえ皆、折角だし集合写真でも撮らない？」

母さんが、そう提案した。

皆、さんせーい！と言って、一列に並ぶ。

どんなに遠く、離れていても、僕らは皆、フレーザーバンド絆でつながっている。

綺麗事かもしれないけど、それは、本当に綺麗なのだろう。

事実僕らには、見えないけれど確実な綺麗事きずながあるのだから。

かしゃっ！とシャッターを切る音が鳴る。

写真には、たくさんのピースサインが映っていた。

これは僕、星河スバルと、大切な、掛け替えの無い友人達の平和な物語。

一旦、幕引きにはなるが、僕たちの物語はまだまだ続く。

やがて地球全体が、宇宙全体が平和な世界になるまで、ずっと、ずっと続く事を、このピースサインに誓うつもりだ。

流星のロックマン peace
— 先ず、おしまい

最終話 平和・peace・ピース（後書き）

という訳で、連載当初から約四ヶ月の月日が経ちました。

長いようで短かった、と言うとそうでもないような、とにかくいろいろ忙しくて月日の感覚があまりありませんでした。

前回の後書きでも述べましたが、この作品の、特に終盤は事故といっても過言ではありません。

スランプ、と言ったらまるでプロみたいな言い方ですが、予想していた以上にネタが尽きてしまったのです。

こんなんじゃあ、駄目だ。

と思い、急遽、最終回に移行させる事にしました。

これまでにこんなに中途半端、且つ無責任な作者がいただろうか、と言われれば恐らく居ないでしょう。

一応、この物語は完結しましたが、要望によっては、エピローグ、更にエアーマン番外編の続きや、本編で語られなかった話などをやっつけていこうと思います。

最後に、

駄文、乱文、奇文、狂文づくしなこの流星のロックマンpeaceを最後まで閲覧いただき、まことにありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7423q/>

流星のロックマン peace

2011年6月13日08時27分発行